I will find a star　～マイナと俺の物語～

九戯 右佐偽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｉ　ｗｉｌｌ　ｆｉｎｄ　ａ　ｓｔａｒ　～マイナと俺の物語～

【Ｎコード】
Ｎ３１７７Ｙ

【作者名】
九戯　右佐偽

【あらすじ】
うだつの上がらないマイナー作家である加賀良彦のもとに、ある日マイナと名乗る謎の少女が現われる。
「あなたを一流のマイナー作家にしてあげます」と宣言するマイナに困惑しながらも、一流作家を目指すため奮闘する良彦。
そんな二人のラブが薄めの恋愛ストーリー！！

※これは企画競作作品でございます。

1話

０１

「……また、ゼロか」

時計の短針が、もうすぐ一周しそうな時間。時間帯ごとに区切られた自作小説のアクセス解析ページには、これでもかと言わんばかりに０が並んでいる。

ネットの無料小説サイトに自作小説の投稿を始めて今日で半年。初めて書いたオリジナル小説は全五十部、総文字数二十万字となかなかの大作になっていた。

「誰も読まなきゃ、意味なんてないっつぅの」

自嘲気味に呟きながら、空白が目立つモニターを切り替え、小説情報のページに戻す。　レビュー、感想、お気に入り、評価と、もはやうんざりするほど見飽きた０の数字。

こんなはずじゃなかった。ネット小説なんて自分が書けば、ちょちょいと簡単に人気を出して、出版して、それで楽に印税生活できるもんだと舐めていた。現実には、誰も見向きもしない駄作を延々と更新し続ける毎日。

最初は、文字数さえ揃ってくれれば、自然と注目されるはずだなんて思っていた。五万文字を超え、それでも人気なんか出ることは無く、なら宣伝の仕方や投稿時間が悪いと色々と試したりもした。結果、何も変わる事は無く、次第には「こいつらは見る目が無い」なんてサイト利用者が悪いのだと思いだす始末。

そして今日。記念すべき投稿から半年。ぐだぐだながらも完結まで漕ぎつけた区切りの日。僕はとうとう思い知る。今まで気付いていながらも意識的に避けていた部分。もう認めるしかないのだろう。——僕には才能が無い。

自信はあった。元々読書が好きなのもあり、アイデアや構成も商業作品にひけをとらないものを持っているつもりだったのだ。やらないだけで、もし自分が書いたならば、すぐにでも出版社の目に止まり、たちまち人気作家の仲間入りだと高をくくっていた。

しかし、いざ書いてみるとなると、思う様に展開は進まず、台詞は単調になり、起伏もない平面なストーリーが延々と続いていくものが出来ていく。それでも半ば意地になりながら今まで書き続けたが、結果は鳴かず飛ばずどころか、誰からも見向きもされない、存在すら曖昧な空気作家となってしまったわけだ。

もうここまでくれば、思い知るしかないだろう。自分の才能の無さと、浮かれ過ぎた思いあがりを。

「フヒヒ、ハハハ……はぁ」

身体の力が一気に抜け、そのまま仰向けに倒れ込む。しみったれた安アパートの低い天井が、己の限界を顕している様で、なんだか泣けてきた。みっともなく頬を流れていくしょっぱい涙をそのままに、どうにでもなれとそのまま強引に眠りにつく。その日みた夢は、うなされながらも、それでも懸命に小説を書いている自分の夢だった。

02

薄暗い部屋に響く機械的な電子音。その音の発生源に目を向けれ

ば、チカチカと着信を告げるランプが点灯する自分の携帯電話だった。普段ならほとんど鳴ることのない自分の携帯電話。その携帯が正常に仕事をしていることに、寝ぼけた頭が急に覚醒していく。
――ヤバい！！　今何時だ！？　俺、寝坊した！？
あわてて携帯を手に取り、通話ボタンを押せば、すぐさま電話先の相手から、不機嫌そうな声が耳に届いてくる。

「こ～ら、いったい何時間遅刻する気だお前は？」

バイト先の先輩である藤森の、若干怒りを含んだその声に平謝りしつつ、すぐに向かうと通話を切る。　携帯ディスプレイには、取り損ねた残り三件の着信履歴。その全てが藤森からだった。　バイトを初めて以来の大遅刻である。
急いで用意し、着替えもそこそこに出かける準備を済ませる。昨日から電源を入れたままだったパソコンのモニターには、誰も読者のいない自分の小説ページが静かに映し出されていた。
その画面を見て、また苦い気持ちが押し寄せてくる。　だが、今は電源を落としてる時間も惜しい状況だ。そのまま嫌な気分を引き擦りながら、俺はバイト先である大手コンビニチェーン店へと足を急がせた。

０３

「すいません、遅刻しました」

「んなこた言われなくても分かってるよ。いいからさっさと着替えてこい」

急いで店内に駆け込んできた俺を見て、金髪のガラの悪そうな店員が陳列途中の弁当を片手に、呆れた声でそう言ってくる。促されるままにバックヤードへと入り、制服へと着替え、自分の名前が書かれたタイムカードを機械に差し込んだ。その時刻欄には、いつもの時間より二時間ほど遅い数字が刻まれる。

「なぁにやってんだよお前。真面目だけが取り柄のくせに」

自分がいない間、一人で業務をこなしていた藤森が品だしを終わらせてレジに立つ。客もまばらな時間帯とはいえ、一人で回すのは大変だっただろうに、それを責めてこない彼の人格に感謝する。

「いえ、本当にただの寝坊なんですよ。いやぁ、マジ申し訳ないです」

「――ん？　お前、なんか目が腫れてない？」

顔を覗きこむ様に見てくる藤森から、僕は逃げる様に顔を背けた。しまった。まさか腫れあがるまで泣いてたなんて。

「いやいや、本当、ただの寝坊ですから。寝すぎて目が充血しちゃったんだと思います」

我ながらヘタな言い訳だと思う。しかし、藤森はそんな僕を見て、何やら納得したように何度も首肯し、腕を組んだ。

「なるほどなぁ――。加賀君も、いっちょ前に青春してるってことかね。いやいや、そういう理由なら遅刻しても仕方がない。いいなぁ、甘酸っぱいなぁ、おい」

いったいどんな勘違いをしたのか、藤森は訳知り顔で嫌な笑みを浮かべてくるが、まさか自分の駄目さ加減に泣いていたなんて言えるわけもない。釈然とはしないが、僕はそのまま藤森の勘違いを放っておくことにした。

そのままバイトはつつがなく終わりの時間を迎え、僕は交代のバイトへと引き継ぎを済ませ、バックヤードに入り着替えを済ませる。店から出た途端、先に出ていた藤森が「おつかれ」と缶コーヒーを投げて寄越してきた。

上手くキャッチできず、不細工なお手だまを披露しながらそれを受け取ると、「元気だせよ」なんて励ましの言葉を残し、藤森はさっさと帰っていってしまう。まったく、外見とは裏腹に妙に気がきく先輩である。勘違いとはいえ、そんな先輩からのありがたい奢りコーヒーをいただきつつ、夕暮れの家路をのんびりと歩いて帰った。

04

初めに気付いたのは、自室であるアパートの扉が開いていたことだった。慌てて部屋から飛び出したとはいえ、鍵はおろか、まさかドアまで閉め忘れていたとは思わなかった。自分の不用心さに呆れつつも、どうせ盗まれる様なものなんてないと、そのまま玄関と呼ぶにはあまりにも小狭いスペースに入る。

次に気付くのが、その玄関に置かれた見慣れない靴だ。履き潰したスニーカーの横に、ちょこんと添える様に置かれた小奇麗な小さめの靴に、一気に警戒心が強まっていく。

――なんだこの靴？　なんでこんなものが僕ん家の玄関に？　まさか、強盗？

このまま部屋に上がると、強盗と鉢合わせなんて展開が待ち受け

ているのだろうか？　そして、「見られたからには生かしちゃおけねぇ」とか言いながら、片手に持った包丁でブスリ、なんて事態に……。

口内に溜まった生唾をゴクリと飲み干し、恐る恐る部屋の中を覗きこむ。僅かに感じる違和感は、中に誰かが居るせいか。

１Ｋのアパートのせいか、玄関から部屋まではすぐだ。既に自分が扉を閉めた音で、強盗犯も僕が帰宅したことに気付いているはずである。そう考えれば、丸腰で部屋に入るのは余りにも危険じゃないか。

とりあえず武器になりそうなものはないかと視線を動かし、玄関に立てかけていた百円のビニール傘を手に取る。強度的に不安は残るが、こんなものでも無いよりはましだろう。

ビニール傘を両手に構え、土足のまま玄関を上がり込む。妙な興奮状態のまま、一気に部屋の中に入り、傘を振り上げ、「この泥棒野郎っ！！　観念しやがれ！！」と叫んだ。

――静寂。勢い勇んで踏み込んだ自分の部屋は、朝起きたそのままの姿を保っていた。片付けもせず、乱雑に積まれた本や雑誌も、なんら乱れることのないままだ。強盗が入るまでもなく、ろくに片付けてもいない汚い自室は、何時もの姿で僕を出迎えたのだ。

「――あれ？」

拍子抜けしつつ、振り上げた傘を降ろす。気のせいだったのか？　じゃあ、あの靴はいったい？　なんて混乱しかけた頭で部屋の中を見回せば、明らかに今朝までは自分の部屋になかったモノが視界に入る。

ソレは叫びながら部屋に乗り込んできた僕の事などまるで気付い

ていない様に、微動だにしないまま、パソコンの前に鎮座し、ひたすら熱心にモニターを覗きこんでいる。
いや、僅かに右手の人指し指のみがマウスのスクロール部分をカリカリと回し、モニターに移るテキストを進めていた。
小柄な身体に薄桃色の無地のTシャツ、なんとも言えない地味な色のスカートを履いた、少女と形容すべきその不法侵入者は、真後ろに立つ家主の存在にまったく気がつかないまま、その大きな瞳でテキストを読み進めていた。

――なんだコイツ？　いったい何をしてるんだ？

いったい何をそんなに熱心に見ているのかと、ピンク色をした頭越しからモニターを覗きこむ。画面いっぱいに表示されたテキストは、昨日、涙の完結を迎えた僕の小説だった。

05

なんなのだろうか？　バイトから帰って、玄関に知らない靴があり、強盗かと思いきや、部屋の中に居たのは見知らぬ少女であり、その少女は何やら熱心に僕の小説を読んでいる。
いったいどんな状況なんだこれは？　余りの事態に思考が追いつかないまま、とりあえず読み終わるのを待ってみようかと、そのまま少女の後ろに陣取り、腰を下ろした。

よほど熱心に読んでいるのか、少女はほとんど動かないまま黙々とテキストを読み進めていく。とき折り思い出したように頭がコクコクと動き、後ろに束ねたポニーテールの髪がその動きに合わせ、文字通り馬の尻尾の様にフルフルと揺れていた。
それにしても、ピンク色の髪とは珍しい。こんな髪色、二次元でもなければお目にかかれないだろうと思っていたが、まったく世の

中は広いものである。それとも実は、こんな地味な格好をしちゃいるが、素行のよろしくない類の方なのだろうか？
不法侵入している時点で素行が良くないのは明白なのだが、この後ろ姿を見るに、害がある様にはどうしても思えない。まさかソレが罠だとすれば、こいつはなかなかの喰わせ者だろう。

そんな事をつらつら考えながらしばらく待っていると、ふいに少女が「ほぅ」と溜息を吐き、テキストページを閉じた。どうやら読後の余韻に浸っているらしく、またしばらく無言の時間が続く。
完全に話かける隙を逃してしまった僕は、ここはやはり余韻が終わるまで待つべきなのだろうか？　なんて迷ってしまう。
そんな迷いは本当に一瞬で終わってしまうのだが、今度は別の問題が間髪入れずに襲ってきた。少女がいきなりくるりと僕の方に振り返ったのだ。
いきなりと言えばいきなりの邂逅。油断しきっていた僕と少女の視線がかち合う。また無言の時間が二人の間に流れるが、気まずさはさっきまでの非ではない。僕はここが自分の部屋だという事も忘れ、何だか悪いことをした様な気分になってしまっていた。

「よ、よぉ」

まとまらない思考のまま、とりあえず何か言わなければと出した言葉がそれだった。知り合いでもあるまいに、何が「よお」だと自分を罵倒したい気持ちに駆られるが、目の前の少女は突然現われたこの部屋の主である僕を見て驚いて固まっている。こんな時、いったいどうすればいいのだろうか。とりあえず、今の僕に出来るのは自分のコミュニケーション不足を恨むことだけだった。

「あ、あなたは、――加賀良彦（かがよしひこ）さん？」

ともすれば無表情とも見える少女の小さな口が開き、何やら妙に聞き覚えのある名前が耳に届く。
というか、それは僕の名前なのだが、少女の可愛らしくも独特といえる声音に、一瞬だけ自分の日本語認識力が馬鹿になったのかと思った。

「……違うんですか？」

黙ったままの僕を見て、少女の顔に不安の色が浮かぶ。　表情の変化に乏しいのか、少しだけ下がった眉だけで、やたらと落ち込んでいる様に見える。

「いや、いやいや、違わないけど。加賀良彦は僕だよ」

何故だか僕の方が慌ててしまい、完全に挙動不審の怪しい人になってしまう。　何故だ？　ここは僕の部屋で、怪しいのはこの女の子の方じゃないか。僕が慌てる必要がどこにあるのか。そうだ、ここは毅然とした態度で挑まねばならないシーンのはず。本気を見せろ僕っ！！

「ところで――君は、僕の部屋でいったい何をしてるのかな？　勝手に人んちに上がるのは犯罪だぜ？」

気を取り直し、まっとうな社会人としての態度で、そう少女に問い直す。例え見た目は可愛い女の子だろうが、もし犯罪者なら、それ相応の対応をせなばなるまい。自慢じゃないが僕はフェミニストじゃないのだ。悪いものは悪いと言える日本人。そして正義は我に在り。
しかし、少女は僕の問いに何も答えず、おもむろに右手を自分のスカートのポケットにすべり込ませる。そしていきなり右手に握っ

た細長い棒状の物体を僕に突き出してきた。

――なっ！？　ここで凶器だと！？　この女、油断ならないヒットマンぶりだ。やはり僕の命を奪うつもりでいやがったのか！！

軽く死を覚悟しかけた僕の眼前に、少女が握る棒状の細長い物体が迫る。先端に鈍色の金具が光り、全体をオレンジのフィルムで包まれたソレは、どこをどう見ても魚肉ソーセージだった。

魚肉ソーセージ……だと？　なんて難易度の高い凶器をチョイスするのか。こいつ、さぞや腕に自信のある殺し屋に違いない。いったいどうやってソレで僕を殺害する気なのかまったく想像がつかない。逆にそれが恐ろしすぎる。殴っても、刺しても、まったく死にそうにないじゃないか。　――まさか、それを僕の鼻に詰めて窒息させ――。

「――あ、間違えました。　これは私のおやつです」

そう言って、少女はあっさりと魚肉ソーセージをポケットにしまい直し、今度は左のポケットをゴソゴソとやりだした。

「これ、貴方の財布ですよね」

少女がそう言って、再び僕の前に差し出した右手には、見慣れた小汚い財布が乗っていた。僕はそれを受け取り、中身を確認する。千円札が二枚に、小銭が少々。どこの店のやつかも忘れたポイントカードや、掠れて文字が見えなくなったレシート等、確認をすればするほど自分の財布の中身と酷似していく。　そして決めてとなるのは、唯一の身分証明書ともいえる保険証。そこには味も素っ気も無い印刷文字で、僕の名前と住所が記載されていた。間違いない、これは僕の財布だ。

「――うん。僕の財布で間違いないみたいだ。でも、どうして君がこれを？」

そう言いつつ、本来僕の財布が納まっているはずの自分のGパンのポケットを探る。当たり前だが、そこに財布はない。おかしいぞ、いったいいつの間にスられたのか。何て手の早い少女なのか。

「失礼なことを言うのは止めて下さい。先ほど私がそこの道を通った時に、たまたま偶然拾ったのです」

抑揚のない声で、少女がそんな事を言う。拾っただって？　確かに朝は本当に慌てていたせいもあり、心当たりは在り過ぎるほど在る。しかし、それをわざわざ届けてくれたという事だろうか？　こんな荒みきった世の中で、そんな親切を、この僕が受け取る日が来ることなんてあってたまるか。「他人を疑え」を座右の銘とする僕を侮るなよ？

「侮ってねぇです。それに、人の親切は素直に受け取るものです。……このクズ野郎」

いつまでも疑いの姿勢を崩さない僕に、少女は業を煮やしたのか、ややうんざりな口調でそう返してくる。というか、今さらりとクズ野郎とか言われた気がしたが、それは事実なので聞き流すことにした。

「そんな事より、この小説。あなたが書いたですか？」

呆れ気味に、少女はさっきまで自分が熱心に読みふけっていたモニターの画面を指差す。表示されているのは僕の小説のトップペー

ジ。

「そ、そうだけど」

恐らくは僕の小説の初めての読者である目の前の少女は、どもりつつ答える僕を、まるで値踏みでもするかの様に見つめてくる。おやおや、これはもしかしてお気に入りを飛び越えて、初めてのファンが出来ちまったフラグではないだろうか？　あれだけ熱心に読みふけっていたのだ、その可能性は大いに有りだろう。

「どどどどうだった？　お、おも、面白かったかな？」

照れくさいやら恥ずかしいやら、しかしここは聞かねばなるまい。なんと言っても、ファンから直接感想を聞ける機会など早々あるものではないだろう。さぁ、僕を褒め称えろ。ちやほやして天狗にさせるんだ！！

だが、その言葉を聞いた少女の顔はみるみる暗くなり、しまいには汚物でも見るかの様な視線を僕に向けてくる。

「正直言って最悪でした。読んでた時間を返せって感じです。なんですかコレは？　こんなもの発表して恥ずかしくないんですか？　それともそういう性癖でも持ってるんですか？　小学生だって、まだ読める文章を書きますよ」

少女の口から次々と飛び出してくる言葉に、僕の心がベキベキと音を立ててへし折れる。なんだコイツ？　批判するにしたってもう少し言い方ってもんがあるんじゃないか？　ましてや書いた本人を目の前にして、何故ここまでズバズバと心をエグる様な事が言えるんだ。何て酷い奴なんだ。コイツの血の色は何色だ。

想像とは真逆の罵声の嵐に、僕はマジ泣きしてしまいそうになっ

た。

「――ただ、一つだけ。本当に一つだけ、あなたの小説の中に光るモノを感じました」

夕暮れの日射しが指し込む安アパートの一室。謎の不法侵入少女は、僕の眼前に立ち、その小柄な身体からは想像できない堂々とした態度で、僕の目を見据ながら、その手を差し出しこう言ってのける。

「……あなたが望むのなら、――私があなたを一流のマイナー作家にしてあげます」

まるで映画の中のワンシーンに、自分が入り込んだ様な錯覚を覚えた。僕はこの時、彼女に神々しささえ感じていたのだ。この少女はきっと、挫折した僕の元に舞い降りた天使なのだと。この少女の導きで、僕は一流のマイナー作家へと昇り詰めるのだ。

一流のマイナー作家へと。ん？　マイナー作家？　少女の前に伸ばした手がピタリと止まる。

「え？　マイナー作家？　あの、一流人気作家とかじゃなくて？」

「はい。マイナー作家です。一流人気作家とか夢みたいなこと言わないで下さい」

「うるせぇよチクショウ！！」

――こうして、マイナと僕の、一流のマイナー作家を目指す物語は幕を開けたのだった。

2話

01

「ありがとうございましたぁ」

買い物客をまったくやる気の無い声で見送り、「はぁ」と溜息を吐く。昨日、あの後、あの不法侵入の変な女の子を半ば強引に部屋から追い出したものの、自作小説をボロクソに罵られたダメージは、日を跨いだ今も癒えぬままだった。

まったく、何が一流のマイナー作家だ。馬鹿にするにもほどがある。　誰がすき好んでマイナーなんかになりたいと思うというのか。

僕はそこまでマゾになった自覚はない。

「どうしたんだ加賀？　やっぱり昨日から様子が変だぞ？　さっきから落ち込んだり、かと思えばいきなり怒りだしたりよぉ」

隣のレジに立つ藤森が本当に心配そうな顔でそう聞いてくる。だが、正直今はそっとしておいて欲しかった。

そして、何も言わずただ落ち込む僕を見て、藤森はそれ以上踏み込むことはしてこない。そんな気遣いを見せられると、こんな事で拗ねて落ち込んでいる自分が、本当に小さい人間に思えてしまう。これじゃ、あの変な女の子に馬鹿にされるのも当然かもしれない。

「藤森さん。藤森さんって、確かバンドやってましたよね？」

僕の突然の質問に、藤森は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐにクールな笑みを浮かべる。

「ああ！　グランドサザンクロスのすご腕ギタリスト、藤森涉（ふじもりわたる）っていやぁ、ちょいと知れた名だぜ」

馬鹿っぽい決めポーズをキメながら、藤森は自慢気にそう言いきった。そうなのだ。彼だって僕と同じ夢追い人なのだ。ならばこの悲しみだって理解してくれるかもしれない。

遠回しではあるが、僕はそれとない言葉を選び、自分にもっとも近いだろうシチュエーションを藤森に振ってみることにした。

「もしですよ。もし、藤森さんの曲を聴いた人が、「こんな最低な曲、聴く価値もない」みたいな事を言ったらどうします？」

「ああん！？　何だとテメェ！！　もっかい言ってみろやぁぁああ！！」

質問した瞬間、間髪いれずに藤森が怒声を上げて僕の胸ぐらに掴みかかってきた。なんだこの豹変ぶりは！？　さっきまで僕の目の前にいた、気さくなバイトの先輩は幻だったのか？

「ひぃぃぃ、すんません！！　すんませんっ！！　調子こいてすんません！！」

まるでカツアゲでもされてる人の様に、僕は半泣きで謝った。なんなのこの人、怖すぎる。

「―っと悪い。でもまぁ、俺だって真剣に音楽やってんだ。そりゃ、そんな事言われりゃ切れちまうぜ」

半泣きの僕の顔を見て正気を取り戻したのか、藤森はそう言って、

掴んでいた僕の胸ぐらを放し、普段通りの彼に戻る。僕はその豹変ぶりに呆気にとられながら、少しだけ漏らしてしまった股間を心配した。

「悪い悪い」と後ろ頭を掻きながら謝罪してくる藤森が、わざとらしく大きく咳払いを一つし、この場の空気を切り替える。そして真剣な顔を作り、僕の目を真っ直ぐ見据えてきた。

「でもな。もし、そいつが、本当に俺の音楽を真剣に聴き込んでそう言ったのなら、俺はその言葉を受け入れるよ。もちろん、納得はしないけどな。

そんで、もっとたくさん曲を作って、そいつに「凄ぇ良い曲だ」って言わせるまで頑張るぜ」

自信満々に言う藤森のその言葉に、昨日、部屋で見たあの女の子の姿が浮ぶ。真剣に、僕が怒鳴り込んで部屋に入っても、まったく気付かないくらい夢中で僕の小説を読んでいたあの姿。

そうだ。あの子が言った言葉は、いい加減なことなんかじゃ絶対ないのだろう。あれは僕の小説に対する、あの子の正当な評価だったのかもしれない。

そうなのだ。あの子に言われる前から、結果は出ていたじゃないか。完結を終えてのオール０の評価欄は、何も語らないまでも、自作の駄目っぷりを顕していたんだ。

「……藤森さん、ありがとうございます。なんか、目から鱗っていうか。僕、大事なことを見失っていたみたいです。勘違いして、せっかく正面から言ってもらえた言葉を否定して……。」

「気にすんな。誰だって迷う時はある」

堪えていた涙が限界を超え、勝手に頬を伝う。藤森は何も言わず、

僕の肩にぐっと腕をまわし、頭をわしわしと掴む様に撫でてくる。

「あのぉ、感動してる所悪いんだけど、レジいいっすか？」

ふいに届いたその言葉に僕と藤森は我に返る。気が付けばそこには、清算待ちの客が長蛇の列を作っていた

02

思いもよらない赤っ恥をかきながらもバイトを終え、一人さみしく家路につく。しかし、僕の気分は昨日までとは違い、晴れやかだった。

それが己の駄目さを受け入れたせいなのか、一人で抱えていたモノを吐きだしてスッキリしたせいなのかは分からない。だが、確実に僕のモチベーションは上がっていた。もういっそ筆を折ろうかなんて考えも、今の僕には微塵も無い。面白いと言ってもらえるまで頑張る。今はその言葉だけが、僕の胸の内でメラメラと燃えあがっているのだ。

「よしっ！！　やるぞ～！！　小説王に僕はなるっ！！」

内なる衝動を抑えきれず、片腕を振り上げながら思わずそう叫んでしまう。周りに誰もいなかった事が唯一の救いだなんて思い、赤面しながら視線を動かすと、最悪な事に、誰もいないどころか、見知った顔がそこにはあった。

しかし、その人物は僕と目が合った瞬間、スッと視線を逸らし、他人の様にそそくさと僕の脇を通り過ぎていく。

「おい、ちょっと、流石にその反応は酷いんじゃないか！？」
慌てて追いすがる僕の声を聞き、まるで他人の様な目をした少女が、あからさまに面倒臭そうに振り返る。
「……楽しそうでなによりです。それでは、急いでますので」
ポニーテールのピンク頭が、それだけ言ってまた歩きだす。本当に急いでいるのか、それともただ単に僕とは関わりたくないのかは分からない。しかし、僕はコイツに言わなければならない事があるのだ。
それを言わなければ、僕は作家として前に進めない気がしていた。だから、僕は背を向けて歩く少女に向かい、さっき叫んだよりも大きな声を出し、こう言う。
「昨日、正直に感想を言ってくれてありがとうなっ！！」
その声が届いたのか、少女の足がピタリと止まる。
そして、ふいに振り返ったその横顔には、夕日に照らされた透明に輝く涙が、少女の細い輪郭を淡く縁取っていた。
「――えぇっ！？　なんで泣いてんだよ！？」
思いもよらないその涙に、僕は少女のもとに慌てて駆け寄ってしまう。
これは困ったぞ！！　いったい僕は何て事をしてしまったんだ！！　女子を泣かせるとは男子一生の不覚じゃないか。世が世なら切腹ものだ。
しどろもどろになりながらも、なんとか泣き止んでもらう術はないものかと思考をフル回転させるが、妙案はまったく浮かんでこな

い。その間にも、声も出さずに涙を流す少女は、濡れて赤くなったその大きな瞳を、ジッと僕に向けるくるだけだった。

03

「粗茶ですが」

淹れたての安物の緑茶を、指し向いに座る少女の前に差し出し、僕は思う。――どうしてこうなった！！　と。

あの後、いっこうに泣きやまない少女の手を取り、どこか人目につかない場所はないかと考え、そんな気の効いた場所など、この辺りには存在しないという現実に直面し、絶望しつつも頑張った僕なのだが、結局は最終手段として、僕の部屋へと少女を招きいれたわけだ。

声も出さず涙を流す少女の手を引きながら、自分の部屋へと連れ込む姿は、もはや犯罪者と疑われても言い逃れできないものだろう。もし良識ある人がその姿を見ていたのなら、僕の両手に冷たい鉄の輪っかがはまるのも時間の問題かもしれない。通報されていないこと切に願う。

そんな僕の心情など気にもしない様に、目の前に座る少女は差し出されたお茶を、ゆっくりと傾けている。　猫舌なのか、やたら慎重に飲むその姿に少しだけ気が抜けてしまうが、いったいコイツはどういうつもりなのだろうか。

「それで、何でいきなり泣き出したりしたんだよ？」

既に涙は止まっているが、真っ赤に充血した両目は、少女が流した涙の量を如実に物語っている。

「……嬉しかったんです」

聴きとるのがやっとの声で、少女はそう言った。

「嬉しかった？」

少女はこくんと肯き、ゆっくりと目を閉じる。その仕草に、ここで接吻！？　とまた勘違いな妄想が頭を駆け巡るが、そんなわけは無いので自重する。

「はい。――私は、今まで読んだ小説には、必ず正直に自分が思った感想を言ってきました。もちろん、それが相手を傷付ける可能性のある言葉である事は分かってるんです。

ですがそれは、嘘偽りない私の言葉であり、思いなんです。そして、作者の方にも、それが一番良い事だとも思っていました。だから、例え憎まれ、恨まれたとしても、駄作は駄作だとハッキリと言います」

少女の口から駄作という単語が飛び出す度に、僕の精神はガリガリと削られていくが、ここはぐっと堪え、聴きに徹することに専念する。もってくれ僕の精神！！

「ですが、やっぱり、そう言われた人は怒っちゃうんですよね。「お前に何が分かるんだ」、「だったらお前が書いてみろ」、「分かる人には分かるんだ」とか。そして、二度と私には読んで欲しくないって。

だから、加賀さんにありがとうと言われた時、「この人は分かってくれたんだ」って。そう思ったら、勝手に涙が溢れてきてしまいました」

少女はそこまで話すと、急に顔を赤くして顔を伏せてしまう。僕はといえば、そんな少女を見ながら、「この女の子はなんて不器用なんだろうか」と呆れていた。

確かに、駄目なものは駄目だと作者に言ってあげるのは正しい事なのだろう。しかし、それにしたって言い方と言うモノがある。もしこの少女が今まで駄作だと判定してきた感想が、昨日、僕に言った様なものばかりだったとしたら、そりゃ嫌われても仕方がないと納得してしまう。みんな真剣に書いているのだ。鞭ばかりじゃやってられないだろう。

「まぁ、だいたいの理由は分かったよ」

とりあえずはそう言って、僕は自分のお茶を喉に流しこむ。

さて、これはどうしたものだろうか？　はっきり言って、自分にはまったく関係ない気がしてしょうがない。逆に感謝されても良いくらいじゃないだろうか。　そう思い、僕が彼女に対して何の負い目もないのだと確認した今、これ以上はこの女の子に踏み込むべきではないのだと思い当たる。

そうだ、僕は関係ない。てなわけで、このストーリーはここでお終いだ。うだつの上がらない作者に、知り合いっぽい女の子が一人できましたよ、なんてありふれた話だ。

「よし、わかった。君も色々と大変だったんだな。でもまぁ、人生色々あるよ。これからも頑張って生きていってくれ！」

思うが早いか、僕は早々にこの話を締めにかかる。　しかし、そんな僕の言葉を遮る様に、少女の声が重なった。

「決めましたっ！！　私はこの恩に報いるためにも、加賀さんをど

こに出しても恥ずかしくない、立派なマイナー作家へと育て上げてみせます！！」

目の前で急に立ち上がった少女に気圧される様に、僕はその勢いに負け、仰向けに倒れ込んでしまう。

いやいや、何を言ってるんだコイツは、いいから早く帰ってくれ。

「いいえ、違うわ。加賀さんだってさっき言ってたじゃない。――マイナー作家じゃない、マイナー小説王にしてみせるっ！！」

一人で盛り上がる少女を横目に、僕は「どうしてそこまでマイナーにこだわるんだ！！」という言葉を飲み込む。本当に、どうしてこうなった！？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3177y/

I will find a star　～マイナと俺の物語～

2011年11月17日20時20分発行